

教育心理学コースの紹介

本コースは、教授・学習や誕生から終末に至るまでの人間発達のしくみ、ならびに発達過程における障害や支援ニーズに対して、心理学的観点から多面的・多角的にとらえ、そのメカニズムと支援方法について研究するコースです。

本コースは、教授学習心理学、発達心理学、発達障害学の3領域から構成されています。また、各領域を担当される先生方の専門分野と具体的な研究指導テーマは以下の通りです。

教授学習心理学

教授者や学習者のどのような心理過程・思考過程が、教育実践を有効なものにするかといった問題について研究します。

■ 工藤与志文 教授

[研究内容]

科学的概念やルールの学習・教授に関する心理学的研究をしています。これらの研究で得られた知見に基づいて、教科学習や教科教育のあり方をどのように変えていけば良いのか、模索しています。近年の研究テーマとしては、「知識操作」を通じた思考力の育成、学習者の「知識機能観」の測定と評価、構成主義的ルール学習論の構築、知識構成水準モデルによる教授学習方略の開発、ルールの深化機能に基づく発展的学習の可能性などが挙げられます。

[指導テーマ]

- ・記号操作の「具現化」による表象形式の豊富化に関する教育心理学的研究
- ・ルールの一般化可能性に及ぼすモデル図の有効性に関する教育心理学的研究
- ・データの変動判断に及ぼす変換操作シミュレーションに関する研究
- ・クリティカルリーディングスキルを育成する大学英語読解授業の開発・実践とその評価
- ・学習者の認識論的信念と指導方略が概念変容に及ぼす影響
- ・中学生における補正による大数の法則の認識が確率の誤った認識に与える影響
- ・歴史学習における知識の構造化の促進に関する研究
- ・第二言語学習者における「信念依存型誤読」の生起に及ぼす読解方略の影響

■ 佐藤誠子 准教授

[研究内容]

「知識を学んでも問題が解けないのはなぜか」「問題解決を促すにはどう教えればよいか」といった問題意識のもと、教える・学ぶ営みに関する心理学的研究をおこなっています。とりわけ、算数や理科などの教科学習において、問題解決場面においてつまづきを示す学習者

のもつ知識や思考過程にはどのような特徴があるのか、また、いかなる教授活動が学習者の問題解決を促進するかについて実証的に検討しています。

[指導テーマ]

- ・達成目標の違いが概念的葛藤を低減する行動の生起に及ぼす影響
- ・算数文章題の解決における在日中国人児童のつまずき一求差場面に焦点を当てて—
- ・学習者のもつ誤概念と修正ストラテジーの効果
- ・問題解決場面における学習者の思考過程

発達心理学

乳幼児期・児童期・青年期・成人期・老年期という人間の誕生から終末までの一生涯を対象として人間発達に関する諸問題を研究します。

■ 長谷川真里 教授

[研究内容]

道徳性と社会性の発達をテーマに、主に幼児から青年期前期を対象とした研究を行っています。これまで、罪悪感、同情、誇りといった道徳感情の発達および向社会性との関係、異質な他者に対する寛容性の発達などを検討してきました。これらは文化差が見られるテーマでもあるため、日本の子どもにとっての“意味”を追求することを心がけています。最近では、集団間関係の問題にも取り組んでおり、具体的には、規範に違反した内集団メンバーに対する集会的罪悪感や連帯責任の理解がどのように発達するのかを探っています。

[指導テーマ]

- ・青年期の居場所感が学校適応感に与える影響
- ・青年期におけるネットいじめに対する認識と加害行動との関連
- ・小学生における感謝想起体験が精神的健康に与える影響
- ・子どもの行動特徴が育児ストレスに与える影響：ソーシャル・サポートを調整変数として
- ・ネガティブなゴシップの有益性に関する子どもの理解
- ・中学生の対人関係と学校適応感との関連
- ・児童における他者からの好意の認知が社会的情報処理に及ぼす影響

■ 神谷哲司 教授

[研究内容]

現代日本における青年期・成人期の心理学的な諸課題を生涯発達という枠組みから明らかにしたいと思っています。これまでは「役割」概念をキーワードに、青年や成人にとって「子

どもとかかわること」がどのような意味を持っているのかについて、育児期家族における親役割やコペアレンティング、保育者の労働環境とキャリア発達の研究を通して探究を続けてきました。近年では、社会構造の急激な変動に伴う、現代的な成人期移行の問題や夫婦の家計管理とファイナンシャル・リテラシー、感情労働をはじめとした保育者の感情制御の問題にも関心を寄せています。

[指導テーマ]

- ・乳児の表情認知における父親の情緒応答性に関する研究 ―育児関与の程度と親役割肯定感に着目して―
- ・青年期における関係的自己の変化動機が友人との付き合い方に及ぼす影響―友人関係の切り替えに着目して―
- ・大学生における職業的ジェンダー・ステレオタイプと職業への就労に対する感情が職業的自己効力感に及ぼす影響 ―職業の性別適性に着目して―
- ・中学校・高等学校養護教諭の教員コミットメント意識に関する研究 ―職務上の影響要因と経験年数に着目して―
- ・高齢期における子どもとの交流がサクセスフル・エイジングに及ぼす影響 ―世代性行動と被承認感に着目して―
- ・青年期における同性愛への態度に関する研究 ―ジェンダー・アイデンティティおよび同性愛についての知識との関連から―
- ・大学生の進路選択過程自己効力に代理経験が及ぼす影響―モデリングと効力予期の観点から―
- ・育児期母親における乳児の情動認知に関する研究 ―母親のアタッチメントタイプに着目して―

発達障害学

知的障害、重複障害、自閉症や学習障害など特別な支援を必要とする人々の心理的支援や教育的支援について研究します。

■ 野口和人 教授

[研究内容]

知的障害を含む発達障害のある子どもたちや成人の方たち、またそのご家族の“リアルな世界”に長期にわたって参与しながら、様々な局面で現れる課題を分析し、解決への道筋を共に探ることを通じて、支援の在り方や発達障害とは何かということについて考えてきました。この研究のスタイルは、アクション・リサーチ、質的研究がメインとなります（指導院生の研究スタイルは様々です）。最近では、学校を卒業した発達障害のある方々が充実した生活を

送っていくために、学校卒業までに、また学校卒業後に必要とされることについて、生涯学習の視点を踏まえた検討を始めています。

〔指導テーマ〕

○博士論文

- ・重症心身障害児の応答性促進に関する発達援助 ―初期発達におけるリーチング機能に着目して―
- ・学齢期の極低体重出生児が示す算数文章題解決から捉えた学習困難の様相とその背景
- ・慢性疾患児の自己概念の特徴と支援
- ・脳性麻痺児のコミュニケーション支援に関する研究

○修士論文

- ・自閉症児の母親における子どもの障害に対する意味づけ ―“反芻”と周囲からのサポートとの関連―
- ・自閉スペクトラム症児が心的状態を理解する際に用いる方略 ―スマーティ課題とプラスター課題を用いた研究―
- ・特別なニーズのある幼児への支援に向けた教職員協働における課題 ―幼稚園を対象とした実態調査より―
- ・成人の自閉症者の不器用さに関する研究 ―実態調査と介入からの検討―
- ・筋ジストロフィー児童・生徒の心理社会的課題に関する研究 ―就学状況の変化の実態及びその要因に着目して― ほか。

■ 横田晋務 准教授

〔研究内容〕

発達障害(主に自閉スペクトラム症)児・者を対象として、人とコミュニケーションをとる際の苦手さやその苦手さに関係する能力に焦点を当てて研究を進めています。特に、知能(IQ)や実行機能と呼ばれる認知機能について、行動実験やMRIを使った脳研究に取り組んでいます。また、発達障害のある人を取り巻く周囲の環境についても同時に研究を進めています。具体的には、周囲の人たちが発達障害のある人に対してどんな態度をもっているのかについて研究し、社会的なバリアを取り除くための方法について検討しています。

〔指導テーマ〕

- ・子どもを褒める行為と子どもの脳形態との関連についての検討
- ・自閉スペクトラム症者の語用論の理解と脳活動に関する研究
- ・障害学生支援ピアサポーターを対象とした対人援助活動による障害観の変容
- ・学校風土、周囲の態度と自閉スペクトラム症のある生徒へのいじめの関係―マルチレベル分析を用いて―